



多田公佑（25歳）は派遣切りによって失業中。アパートで一人暮らし。親しい友人も近所づきあいもなく、携帯ゲームだけが友だち。再就職もうまくいかず自暴自棄な生活を送るうちに、ふと死のうかと考える。

ベランダに出ると、男の怒鳴り声が聞こえてきた。隣室を見ると、男（戸倉）が小さな男の子（武史）を二階から落とそうとしている。恐怖で泣き叫び、母（美波）に助けを求める武史。顔には殴られたようなアザが見える。見ていたら戸倉に睨まれ、逃げるように部屋に戻りアパートを飛び出す。



商店街をあてもなく歩いていた公佑は、いい匂いがしてくる小さなパン屋の前で立ち止まる。店主の珠子に試食をすすめられ、公佑はクリームパンを一個買う。部屋に戻ると、腹を空かせた武史がベランダに締め出されていた。クリームパンを武史に渡す公佑。

珠子は、顔見知りの武史が虐待を受けているのではないかと噂を聞き、心配する。偶然、隣人である公佑と出会い、事情を聞いて民生委員・児童委員に相談することに決めた。そのことが縁で公佑は珠子の店でアルバイトを始めた。仕事帰り、一人で遊んでいた武史と一緒に遊び、仲良くパンを食べる。それを見た戸倉は嫉妬と怒りの眼差しで二人を見る。



公佑が部屋に戻ると、隣室で戸倉が暴れ出している。人が壁にぶつかるような音、そして武史と美波の悲鳴。いてもたってもいられなくなって、珠子に連絡する公佑。武史の助けを求める声に突き動かされるように、美波の部屋のドアを叩く。

入院した武史のもとに集まる公佑、珠子、美波。珠子は誰にも話さなかった阪神・淡路大震災で起きたことを話す。公佑も自分の身の話を語り始めるのだった。



学習のねらい

- 登場人物の言動を通して、「いのち」を軽んじる風潮に流されていないか、日頃の自分自身の言動を振り返る。
- 「いのちのきずな」に気づくとともに、互いの人権を尊重し合うことは、生きることの素晴らしさや生きる喜びにつながるということを認識する。
- 「いのち」を大切にする生き方をするために、人と人とのつながり、家庭の果たす役割、家庭と地域社会の関わり方について、自分の問題として考える。